

伊賀市アーカイブ講演会

二〇二二年二月二十七日（土）

芭蕉像の諸相

於ハイトピア大研修室

関西大学名誉教授

藤田 真一

#### 一 許六筆「芭蕉曾良行脚図」（奥の細道行脚之図）

許六（1656～1715）…彦根藩士。森川氏。蕉門。元禄五年（1682）八月入門、翌年五月帰藩（以後芭蕉との面会はない）。編著『本朝文選』『宇陀法師』『韻塞』など。画技にも秀で、芭蕉像を残す。

\*「芭蕉曾良行脚図」

落款…「元禄癸酉春五老井居士許六謹画」（元禄六年1693春）在江戸中

#### 二 杉風筆「芭蕉座像」

杉風（1647～1732）…幕府出入りの魚問屋。杉山氏。鯉屋。最初期からの門弟で、賛助者。芭蕉自筆物「鯉屋物」（天理図書館蔵）。芭蕉像を手がける。

\*「芭蕉座像」

落款…「亡師芭蕉翁之像画杉風」

#### 三 破笠筆「芭蕉座像」

破笠（1663～1747）…漆芸家。小川氏。江戸住。蕉門。漆芸をはじめとする工芸を本領とし、絵画にも優れる。晩年、工芸の技によって津軽藩に仕える。

\*「芭蕉座像」

落款…「芭蕉翁末弟 卯観子笠翁年八十有二図」（寛保四年1744）没後五十年

#### 四 蕪村筆「芭蕉像」二点

蕪村（1716～83）…南画家。与謝氏。大坂生。1751年より在京。「奥の細道絵巻」を手がける。俳画の名作を多数残す。

\*「芭蕉座像」

賛…「  
蕪村拝写」

花にうき世我酒しろくめし黒し

夏衣いまだ風をとりつくさず

はせを野分して盪に雨をきく夜哉

としのくれ笠着て草鞋はきながら」

\*「芭蕉立像」

賛：「

蕪村写

人の短を云ふことなかれ  
おのれが長を説ことなかれ  
もの云へば唇寒し秋風

(芭蕉立像)

これは、五老井が図せる蕉翁の像なり。句は、  
めい月や池をめぐりて終夜、也。それを  
坐右の銘の句に書かへ侍る。」

五 蕪村の「芭蕉像画論」

\*安永七年（1778）十一月二十六日付子謙宛書簡

翁肖像画法、左の如し。

○杉風が画の肖像も少々俗氣有之候故、いささか添削を加候。都<sup>すべて</sup>て肖像之画法は、  
年を寄せ候が能<sup>よく</sup>候。

○杉風原本にはしとねを敷候へども、是はよろしからず候。仏家之祖師などの像には  
褥もよく候へ共、翁などのごとき風流洒落にて、脱俗塵たる像は、只寒骨相にて寂<sup>2</sup>  
しき方を貴び申事に候。

○愚老、むかし関東に於て、許六が画の肖像に素堂の賛有之物を見申候。嚴然たる真  
跡、伝来正しきものに候。其像之面相は、杉風が画たる像とは大同小異有之候。許  
六が画たるも、翁現世の時之画と相見え候。杉風・許六二画の内、いづれが真にせ  
まり候や。無覚束候。愚老写する所は、右二子の画たる像を参合して写出候。庶幾  
こいねがわくは其真にせまらん事を。